

第4話 内藤洋子の時代

■ “世界のクロサワ”に見出され、鮮烈デビュー

1950年5月26日生まれの内藤洋子は、50年代生まれで初のアイドル女優である。湘南の医師の家庭で育った彼女は、小学校時代から少女雑誌「りぼん」のモデルを務めており、その写真が『赤ひげ』65に出演する少女を捜していた黒澤明監督の目にとまり、黒澤作品でデビューを飾るという幸運を射止めた。

赤ひげ＝三船敏郎の診療所に勤める若き医師・保本登＝加山雄三の婚約者となる御典医令嬢に、黒澤は清純で初々しいイメージの演技未経験者を起用したい意向だった。なかなか適格者が見つからず困っているところに、内藤を発見したのである。直ちに東宝と専属契約が結ばれ、中学1年生の少女は長期にわたる特訓と黒澤組現場の重圧に耐え、鮮やかにデビューを飾る。撮影は延びに延び、封切りのときには3年生になっていた。

この作品でいきなり65年度製作者協会新人賞を受けた内藤は、翌66年1月放映開始のテレビドラマ「氷点」の少女ヒロインに抜擢される。

原作小説は朝日新聞の賞金一千万円懸賞小説募集の入選作であり、北海道在住の無名作家・三浦綾子を一躍スター小説家にした作品だ。この募集は63年に朝日新聞の大阪本社創刊85年、東京本社創刊75周年記念事業として企画された。大卒初任給が平均1万9400円（現在は20万5000円）、新聞購読料が月390円、ハガキ5円、国鉄（現JR）初乗り10円、芥川賞の賞金が10万円（現在は100万円）の時代だから、今なら賞金一億円という感じだろうか。東京五輪前、日本が急激に豊かになった時代を象徴するような景気のいい話だ。

当然大きな話題になり、世間注視の中で64年12月から65年11月まで朝日新聞朝刊に連載された。連載開始当時小学校6年生だったわたしにも、この小説が入選し掲載されるまでの騒ぎは、家に配達される朝日新聞のさまざまな記事で記憶に残っている。さすがに小説の内容の方は、連載を時々覗いてみるだけで毎日読みはしなかったが。

連載終了後出版され70万部以上を売り上げるベストセラーになるとともに、いち早く翌年1月にはNET（現テレビ朝日）でテレビドラマがスタートし、3月には大映で映画化された。出版、テレビ、映画のメディアミックスである。普通の新聞小説と違い、完結した一篇として応募されたものを1日分ずつに分けての掲載だったから、連載終了と同時に出版でき、テレビドラマや映画の方も前もってシナリオを用意することができたために、こうしたタイムリーな芸当が可能となったのである。

内藤洋子の役は、3歳のとき、同じ年齢の娘を殺された医師夫婦の養女にされ、後に自分がこの家の娘を殺した犯人の娘だと知らされる（実はそうではなかったとわかるのだが）

複雑な立場で、「陽子」という名だ。新珠三千代演じる継母から虐められる可憐な姿が視聴者の眼を惹きつけ、一躍全国区の人気を獲得した。4月17日の最終回は視聴率42.7%を獲得している。5月に日本テレビで始まった「笑点」の番組名は、この大ヒットドラマ「氷点」をもじって名付けられた。

ちなみに映画版『氷点』（63 山本薩夫）は3月26日に公開され、陽子を日活『風と樹と空と』（64 松尾昭典）でデビュー後大映に転じた新人女優・安田道代（現・大楠道代）、継母を若尾文子が演じている。

内藤洋子は、こうして俳優生活の恵まれたスタートを飾った。『椿三十郎』61『天国と地獄』62『赤ひげ』65と、その年の日本映画興行ランキング1位の作品を連発して全盛を誇った黒澤明は、『赤ひげ』の後東宝を去り三船敏郎とのコンビもこれが最終作となる。東宝撮影所に君臨した「黒澤天皇」最後の作品でデビューし、メディアとしての隆盛を極め始めたテレビドラマで顔と名前を売る理想の展開だった。

■ 恩地日出夫による主演2作

映画第2作は『大菩薩峠』（66 岡本喜八）である。1935年に稲垣浩監督、大河内傳次郎主演で初映画化されて以来、53年渡辺邦男監督、片岡千恵蔵主演、57～59年内田吐夢監督、片岡千恵蔵主演、60～61年三隅研次・森一生監督、市川雷蔵主演でリメイクされてきた中里介山の大長編時代小説5回目の映画化は、仲代達矢主演で三船敏郎、加山雄三、新珠三千代ら豪華キャストの大作だった。内藤が演じたのは主人公・机竜之助に斬られる老人の孫娘で、雷蔵版では当時の大映の看板女優・山本富士子が演じた役だから東宝側の彼女に対する期待のほどがわかる。

次は早くも主演作となる『あこがれ』（66 恩地日出夫）だ。木下恵介原作、山田太一脚本の正統派青春劇だった。酒浸りの父（小沢昭一）から児童養護施設に預けられて育ち、今は金の無心を繰り返す父を避けて仕事を転々とする身ながら明るさと真摯さを失わぬ娘を素直な演技で表現している。同じ施設で育ち今は養子になって何不自由ない老舗の若旦那である幼なじみの青年（田村亮）と再会したことで、二人は恋に落ちる。

しかし、養父（加東大介）は「身分が違う」と二人の結婚を許さない。娘は身を引いて姿を消し、落ち込む息子の姿に、養母（賀原夏子）が夫を説得する。一方、青年を幼い頃手放した実母（乙羽信子）が再婚先の家族とブラジルへ移住することになったのがわかる。最後に一目会いたいという母の願いに対し養父母への遠慮で逡巡する彼の背中を、当の養父母の言葉が押ししてくれ、母子は移民船を見送る栈橋で再会した。その場に娘も現れ、ハッピーエンドとなる。

実に古典的な青春メロドラマだが、薄幸のヒロインを現実にはお嬢さん育ちである内藤洋子に妙な技巧を凝らさせず素直に自分らしく造形させた恩地演出が成功している。いかにも悲哀を感じさせる女優が演じたとしたら、古臭いものになっていただろう。実年齢16

歳の内藤に結婚を考える 19 歳の役を宛てたのも、ヒロインのキャラクターを透明感あるものにしていた。

相手役の田村亮は大俳優・阪東妻三郎の四男で田村高広、正和の弟、20 歳で成城大学在学中の彼も初主演だった。この新人二人を、前記の顔ぶれに加え沢村貞子、小夜福子などベテラン俳優が脇を固めて支えている。テレビドラマ「氷点」の継母だった新珠三千代も、ここでは二人を母代わりに育てた施設の職員として登場する。話の方も、恋人同士を周囲の大人たちが見守る構造になっており、貧しい敗戦直後から高度経済成長期に至る戦後社会史を背景に、新世代の門出を旧世代が支える世代間物語としてすぐれたものがあつた。なお、内藤の少女時代を演じた 7 歳の子役・林寛子は、8 年後アイドル歌手としてデビューし活躍する。

監督した恩地日出夫は 33 年生まれ。61 年、27 歳という若さで監督デビューした。その意味で内藤洋子の華やかな登場ぶりと重なるものがある。ただ、『若い狼』61 をはじめとする初期の 4 作品が観念的に過ぎると見られ、2 年以上撮る機会を与えられなかった。久々に振り当てられたのが、このアイドル女優売り出しのための青春映画だったのである。ここでみずみずしい演出ぶりを見せたことで恩地は新境地を開き、続く『伊豆の踊子』『めぐりあい』の青春映画三部作を成功させた。

酒癖の悪い父親、貧しさ故子を手放す母親といった戦後間もない時期の貧しさの情景が若者たちの背後にあるのは、急激な経済成長の裏に依然として存在する負の部分の象徴でもあつた。表で繁栄していても、まだまだ豊かさがすべての人間に行き渡るには至らない。日本中が「一億総中流」意識で満たされるのは 70 年代に入ってからである。

1908 年に始まったブラジル移民は、近代日本の貧しさの表れだった。第二次世界大戦で日本とブラジルの国交が断絶したことで中断したが、国交回復後の 53 年に復活し、移民船が廃止になる 73 年まで続く。60 年に 17 歳でデビューしたプロレスラー、アントニオ猪木はブラジル移民帰りの触れ込みだったので、子どもたちの間でもこの移民制度は広く知られていた。

「身分が違う」との発想は、豊かになったこの時代にも戦前から続く古い価値観が残存していたことを思い出させる。若い者同士が自由に父母の許しを得ないと結婚できない暗黙の掟があり、世間体とか身分差とかの言葉が横行していた。今の若い人には想像もできないだろう。わたしたちの世代が結婚する 80 年代になっても、まだそうした家族、一族や世間の壁が立ちはだかつていたのである。それが大方崩れるのは、戦後民主主義教育を受けた世代が結婚適齢期の子の親になる 90 年代まで待たねばならなかった。

主演第 2 作『伊豆の踊子』(67 恩地日出夫) でも、内藤が演じたのは旅芸人という貧しい暮らしの少女だった。今度は 14 歳の役である。時代は大正末、伊豆を旅する一高生が踊り子と淡い恋をするこの物語は、筋を説明するまでもなからう。1933 年に五所平之助監督、田中絹代で初映画化され、54 年野村芳太郎監督、美空ひばり、60 年川頭義郎監督、

鰐淵晴子、63年西河克巳監督、吉永小百合に次ぐリメイクだった。74年西河克巳監督、山口百恵を含め5度も映画化されたことになる。元来、「身分違い」の典型のような古い人間関係構造だが、恩地演出はそこへ随所に新感覚を交えており、斬新で印象深い。

相手役の一高生には黒沢年男（現・年雄）。64年の東宝ニュータレント募集に合格して小さな役をいくつかやった後、『女の中にいる他人』（66成瀬巳喜男）で巨匠の目にとまり『ひき逃げ』（66成瀬巳喜男）で世に出た。軽い風俗喜劇『パンチ野郎』（66岩内克己）に続く2本目の主演作である。以後東宝青春映画における男優の柱となっていく。

■絶頂期を迎えた67年

続いて内藤は、聾啞の夫婦の愛情を描き社会的にも大きな話題となった大ヒット映画『名もなく貧しく美しく』（61松山善三）の後日譚『続・名もなく貧しく美しく 父と子』（67松山善三）に田村亮と共に若い聾啞者役で出演した後、松山が監督する『その人は昔』（67松山善三）に主演し、歌謡御三家のひとり舟木一夫と共演する。前年舟木の歌手デビュー3周年を記念して芸術祭参加の音楽アルバムのレコードとして発売されヒットした「心のステレオ その人は昔 -東京の空の下で-」の映画化だ。筋を書き下ろした松山が自らの脚本、監督で、これに当たっている。

北海道の海辺で一緒に遊んだどちらも貧しい漁師の子である青年と少女が上京して働き始め、行き違いから悲しい結末を迎える話の方は、田舎出の若者が東京で傷つくという新味のないものだったが、歌謡映画とも少し違うミュージカル風の音楽場面が目新しかった。映画版のために舟木の歌以外に内藤の歌う曲も用意され、松山善三作詞、船村徹作曲の「白馬のルンナ」は大ヒット曲となった。歌唱はやや稚拙でも、それがかえって独特の魅力となり人気を呼んだのである。

この頃、内藤洋子の人気は絶頂にさしかかっていた。脚本家・荒井晴彦の言によれば、この年早稲田大学に入って映画研究会に入部すると、歴史ある早稲田大学映研の67年度ベストワンは『その人は昔』だったのだそうだ。この年もう1本、松山善三脚本で舟木と共演した『君に幸福を センチメンタル・ボーイ』（67丸山誠治）では、内藤は早稲田大学の女子学生役だったから、映研の面々も喜んだことだろう。

能登から上京して菓子職人修業中の青年が同郷の女子学生と知り合い、最初は自分も大学生だと偽って付き合うようになるが嘘が辛くて白状する。それでも彼女の気持は変わらなかったが、年増温泉芸者の息子と地元の大温泉ホテル令嬢という「身分違い」で彼女の親から仲を引き裂かれる結末は、あまりにもありきたりで鼻白む。当時でさえ、さすがに時代がかった。

■「お嬢さんで妹」というキャラクター

ただ、本来お嬢さんっぽいキャラクターの内藤にそのままお嬢様をやらせる方向は、彼

女固有の持ち味を存分に引き出す結果を生む。それまでの貧しかったり幸薄かったりする役柄では、それを哀れっぽくなくこなすところに良さがあったのだが、似合わない面があったのも事実である。物怖じせず闊達に振る舞う役は、本領発揮という感じがあった。

また、実生活でも 4 人姉妹の三女である内藤には、「妹」イメージもあった。これを初めて引き出したのが、『あこがれ』と『伊豆の踊子』の間に出演した『お嫁においで』（66 本多猪四郎）である。加山雄三の大ヒット曲を映画化した若大将シリーズの別バージョンとも言える作品で、スポーツマンで仕事もできる船舶設計技師（加山）の妹として、兄が一目惚れした娘（沢井桂子）との仲を取り持とうとする。

これも松山善三の脚本で、造船会社社長の息子とホテルのウェイトレスである娘との「身分違い」ゆえに彼女を遠ざけようとホテルに圧力をかけて解雇させる両親が登場する。それを知り怒った兄は娘に謝るが、彼女は「身分違い」の相手からの求婚より、気の置けない仲であるタクシー運転手の青年（黒沢年男）の方を選ぶ。

お嬢さんで妹というキャラクターをみごとに生かしたのは、5 本目の主演作『育ちざかり』（67 森谷司郎）だった。ここで内藤は、実年齢と同じ 17 歳の等身大の女子高校生を演じてみせた。鎌倉の良家の末娘という設定は彼女自身の生い立ちとほぼ同じであり、役名も「陽子」で高校生なのもそのままだった。映画の惹句も、「すてきなセブンティーン！ 内藤洋子の魅力がいっぱい！」とある。

母（三宅邦子）はもちろん、嫁いだ長女（村松英子）、大学の演劇部に所属する次女（十朱幸代）の姉二人に「デコ助」と呼ばれて可愛がられ愛情に包まれてのびのび育つ女子高生だ。この呼称は『お嫁においで』でも使われ、おでこの広い内藤のチャームポイントを捉えていた。海や軽井沢で過ごし、水泳、乗馬、テニス、ボーリングと、青春を謳歌するひと夏の物語だ。

恋に恋する幼さや、大人の世界に憧れたり嫌悪したりする揺らぎが、青春の危うさと美しさを感じさせる。次女の恋人（黒沢年男）に憧れ恋心を抱くが、彼は姉と結ばれ少女は失恋を経験する。でも、夏休みが終わると元気にテニスコートを飛び回っている切り替えの早さもこの年代ならではだった。この映画で初プロデューサーを務めた山田順彦が、「小寺朝」名義で脚本を書き、井手俊郎が「脚色」という形で補完している。

監督した森谷司郎は、恩地日出夫と同期入社 of 31 年生まれ。恩地より 5 年遅れて 66 年に『ゼロ・ファイター 大空戦』でデビューしてから 3 作目で、存分に力を見せつけた。劇映画でありながら、どこかドキュメンタリー的な現実感を持たせる演出は、それまで江戸の娘や貧しい少女、大正時代の旅の踊り子など自身とは異なる役を演じてきた内藤洋子の等身大の魅力を引き出すことに成功したのである。

この映画で初プロデューサーを務めた山田順彦が、「小寺朝」名義で脚本を書き、井手俊郎が「脚色」という形で補完している。33 年生まれの山田は恩地、森谷と同期入社で芸芸部に配属され、製作担当者を経てプロデューサーになった。その後も内藤洋子作品など青

春映画を多作している。同年生まれの 57 年入社で文芸部に入った若大将シリーズの田波靖男といい、この世代が東宝青春映画を牽引したのである。

この路線を踏襲したのが、翌 68 年の『年ごろ』だ。こちらは春休みの春スキーから話が始まる。まるで続編のように役名は「陽子」で父（佐野周二）、母（京塚昌子）、嫁いだ姉（村松英子）、兄（松山省二、現・政路）に囲まれた良家の末娘。大学生の兄の友人（黒沢年男）とのデートでは物足りず、兄の恋人（吉村実子）に接近してきたカッコいい三十男のパイロット（岡田真澄）に惹かれるものの、一生懸命背伸びしても手が届かない。

生意気に大人ぶって恋愛の世界を垣間見るおませな少女を、内藤はのびのびと演じた。同級生役の松本めぐみ、高橋厚子と緑したたる風景の中ではしゃぐ姿は、何不自由ない女子高生の輝きに満ちている。この姿を、「ブルー・シャトー」など人気 GS ブルーコメツの曲に乗せて軽快に描いたのが、これが監督デビュー作の出目昌伸。恩地、森谷の 2 期後輩で 32 年生まれの新鋭が、2 人の先輩に伍して東宝青春映画路線に颯爽と登場した。

この路線を担った恩地日出夫、森谷司郎、出目昌伸の新鋭監督陣、プロデューサーと脚本の山田順彦が、内藤洋子作品を洗練されたものに仕立てていく。「妹」イメージは『お嫁において』『育ちざかり』『年ごろ』で、すっかり定着した。

■「社会派青春映画」で魅力が爆発

その線上で生まれた傑作青春映画が『兄貴の恋人』（68 森谷司郎）である。『育ちざかり』の次に橋本忍脚本と組んで撮った社会派映画『首』（68）で芸術選奨文部大臣新人賞に輝くなど高い評価を受けた森谷が、改めて取り組む本格的青春映画だった。

モテまくる兄貴（加山雄三）の恋人たちに嫉妬する女子大生の妹が、もちろん内藤洋子だ。父（宮口精二）、母（沢村貞子）と商社マンの兄の四大家族。兄に来る縁談にケチをつけるだけでなく、兄の会社に勤める友達（岡田可愛）を通して女性関係を監視する。この「妹」ぶりが内藤の真骨頂だ。

若大将がそのままエリートサラリーマンになったような兄は、とにかく女性にモテる。街で酔った上司にからまれていた女性（豊浦美子）を助ければ惚れられるし、年上のバーのマダム（白川由美）にも好かれている。その上、上司から結婚相手候補として紹介された取引先社長の令嬢（中山麻里）との仲も良好だ。妹にしてみれば気が気ではない。最愛の兄を、誰にも取られたくないのだから。

一方で周囲の勧めるままに方々の令嬢との見合いを繰り返す兄は、中流家庭育ちの身から、結婚によって上流階級の仲間入りをしたいと考えるあつけらかなとした上昇志向がある。社長令嬢との交際が進むにつれ、真剣に結婚を決意しそうになる。そのとき、打算や野心抜きで気にかかる女性がいることに思い当たった。家庭の事情で退職した元同僚女子社員（酒井和歌子）である。

病身の母を抱え、ヤクザの兄（江原達怡）が頼れないために家を支えねばならず、せつ

かく入った銀座の商社を退職して地元川崎の場末にあるスナックバーで働く彼女の元を訪ね、自分の気持を確信した彼は、令嬢に率直に謝って結婚を断る。そこへアメリカ勤務の話が舞い込み、一緒に行きたいと元同僚に求婚するのだが、彼女は「身分違い」が気になってそれを断ってしまう。本当は彼が大好きなのに、同じような境遇の地元青年（清水紘治）が自分には似合いだと思い込もうとするのだ。

諦めきれず再び川崎を訪れた兄（加山）は、彼女（酒井）の兄たちの喧嘩に巻き込まれ入院騒ぎを起こしてアメリカ行きをフイにした上、福岡への左遷が決まる。失意の姿を見て、妹は兄を最愛の人と結びつけようと決意した。彼女を呼び出し、「身分違い」なんかどうでもいい、互いに好きな同士が計算抜きで一緒になるのが一番いいに決まっている、と熱弁を振るう。それに背中を押されて、彼女も自分の気持に素直になり、二人は結ばれるのだった。

加山雄三、内藤洋子、酒井和歌子、当時の東宝三大人気スター共演というのが売り物の映画である。加山を正面から映し、その右に内藤、左に酒井が挟むように横顔を見せる写真と、惹句の代わりに三人の名が大きなロゴで強調されるポスターの図柄は、スターの顔と名前を呼ぶスター映画ならではの構えだった。

しかし内容となると、加山も酒井も自分の意思を明確に表明できず周囲に流される傾向のある役を演じていて新味がない。それに対し自立した意識を持ち意志的に行動する内藤の役は、少しも古臭くなく、学生運動など日本でも世界でも若者の旧世代に対する異議申し立てが頻発した 68 年の気分を反映しているかのようだった。

家族や兄姉に従属する範囲内で甘える妹などではなく、いよいよになると兄を叱咤激励する勢いだ。『お嫁においで』『育ちざかり』『年ごろ』とははっきり違い、自らの人生観、恋愛観を自信たっぷりに披露した。若者が、従来の価値観や「世間の眼」といった旧弊に立ち向かい自己主張しようとし始めていた。親や上司の言いなりになる加山や、「身分違い」ゆえ身を引こうとする酒井に対し、内藤の強さが光る。

その結果、『お嫁においで』のように、上流階級対下層階級の図式的な恋愛関係の結果、女が同階級の男と結ばれるという単純な話にはならない。中流階級の男が上流階級への上昇志向に燃え会社のために働くというのは高度経済成長期の典型的出世志向だった。その裏には、下層階級の女が「身分違い」に臆病になって分相応に生きようとする諦念がある。そうしたお定まりの発想を女性である妹の無鉄砲なまでの確信によって乗り越えさせたところに、この映画の新しさがあった。

兄妹と家族、兄を取り巻く女性たちの生活を通して高度経済成長期の真っ只中にある 1968 年の日本社会の実像が浮かび上がってくる。一種の「社会派青春映画」かもしれない。「昭和元禄」とまで呼ばれた繁栄社会の、表通りと裏通りの両方が描き出される。中流の一家は阿佐ヶ谷に住み、兄の会社は当時の上流階級の象徴・銀座にあり、元同僚はブルーカラーの街川崎と、場所もそれを表していた。

『兄貴の恋人』が好評だったことは、70年に連続テレビドラマとしてリメイクされた事実が物語る。最初の何回かを森谷司郎監督が演出しており、兄は夏木陽介、妹は森和代、酒井和歌子の役は松尾嘉代が演じている。

■失速、そして結婚、引退

内藤洋子は、全盛期の代表作ともいえる『兄貴の恋人』の後、作品に恵まれず助演作が多くなる。有吉佐和子「仮縫」を原作に主演の岸恵子に対抗する若い女性役を演じた『華麗なる闘い』(69 浅野正雄)、中村錦之介、仲代達矢主演で芥川龍之介原作を映画化した『地獄変』(69 豊田四郎)への起用など、首を傾げたくなるような企画を与えられたし、社長シリーズやクレイジーもので彩りの役割を要求された。

その後の唯一の主演作『娘ざかり』(69 松森健)は、『兄貴の恋人』以前の「妹」映画に退行したような印象しかない。それは、『兄貴の恋人』と同じく女子大生役でありながら、思考や行動の幼さは『育ちざかり』『年ごろ』の女子高校生と大差ないものだったからだ。好奇心で大人の世界に憧れ、羽目を外して無鉄砲とも思える挙に出る。これでは自立した考えを持てるはずがない。

学生運動、アングラ演劇といった大学風俗が出てきても、彼女は面白半分近づいているだけだから意味をなさない。自動車部に入って免許を取り、親に買ってもらった車を乗り回す姿はいい気なお嬢様でしかなく、高校生と違い無邪気では済まされない。前2作と同じく村松英子が嫁いだ姉を演じるなど『育ちざかり』『年ごろ』に続く三部作として構想されたのだろうが、明らかに失速していた。

そして70年、『バツグン女子高生 16才は感じちゃう』(70 松森健)は、タイトルの俳優序列こそ内藤が筆頭であっても、内容はテレビドラマ「柔道一直線」で一躍人気を呼び映画初出演の吉沢京子が主役だった。この作品の後、内藤は20歳にして結婚、引退、渡米し芸能界を去るのである。